母娘の関係性が娘の夫婦関係・親役割に及ぼす影響（2）

―青年期の母子関係および精神的自立の男女比較からの検討―

東海林麗香
（山梨大学大学院　教育学研究科）

問題

近年，母娘関係における距離の近さやそこから派生する問題が指摘され，様々なメディアに取り上げられている（斎藤，2008；信田，2008 など）。例えば，心理的離乳の時期をすぎてもなお緊密であり続ける母娘関係の負の側面に着目した「一卵性母娘（信田，1997）」という表現は広く知られるところである。また学術的にも，親子の分離・自立の重要性や難しさが指摘され（根ケ山，2006），特にそれは青年期以降の娘とその母親との関係における＜自立と依存のアンビバレンス＞として注目されている。少子化による妻方同居の増加，実母による娘の子育てサポート等，結婚後も母娘関係を密に保つケースが増加しているが，その一部には，それによる役割移行や精神的自立の困難も見られる。例えば子育てに当たって，「自分の子育てについて批判されるのではないか，叱られるのではないか」などと母親の目を気にすることで，自分なりの母親役割を確立することができず，夫との協働した子育てもできないでいるといったケースが見られた（東海林ら，2008）。

しかしながら母娘ともに，世代間の関係を持つことは必ずしもマイナスではなく，各世代が独立的に生きることが単一の目標となるものではないだろう。個としての発達，そして結婚後に家族を設けた場合には生殖家族としての発達と，原家族との関係を保ち続けることをどのように両立させればいいのだろうか。このような背景から発表者は，母娘の関係性が娘の夫婦関係・親役割に及ぼす影響について検討を進めているが，それに先立ち東海林（2012）では，成人期への移行期である青年期における精神的自立および精神的健康に，母親との関係性がどのように影響しているのかについて 159 名（平均年齢 19.5 歳）の女性を対象に質問紙調査とインタビュー調査によって検討した。その結果，先行研究から予想した【母親とのアンビバレントな関係性による抑うつへの影響】や，【近すぎる精神的距離による精神的自立度の低さへの影響】は見られなかった。本発表では，進路決定前後の青年のデータを追加し，加えて男女比較を行うことで，先行研究からの予想についてさらに検討を進める。

方法

【質問紙調査】

調査協力者と手続き：女性 222 人，男性 143 人。平均年齢は 21.3 歳。

手続き：短大・大学の授業にて調査を実施・回収。

質問紙の構成：①フェイスシート：年齢，学年，家族構成，居住形態。②精神的自立：精神的自立尺度（福島，1992），22 項目，5 件法。「将来志向」「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」「社会的視野」「自己統制」の 6 側面からなる。③母子の心理的距離：母子密着尺度（藤田，2003），32 項目，5 件法。④母子間コミュニケーション態度：夫婦間コミュニケーション態度尺度（平山・柏木，2001），22 項目，4 件法。ポジティブな態度「共感」「依存･接近」，ネガティブな態度「無視・回避」「威圧」の 4 側面からなる。⑤自己評価式抑うつ尺度，20 項目，4 件法。

【インタビュー調査】

調査協力者は，質問紙調査への協力者のうち，インタビュー調査への協力を承諾した女性 15 人，男性 7 名である。主な質問項目：母子関係に関する印象的な出来事，母子間葛藤，母の自身への希望，理想の母子関係であった。調査時間は 45 分から 90 分であった。

結果

男女の平均点を比較したところ，精神的自立のうち有意な差があったのは，「価値判断・実行」「責任」「社会的視野」であり，いずれも男性の得点が高かった（順に $p<.01$，$p<.05$，$p<001$）。また，心理的距離は女性の得点が有意に高く（$p<.001$），コミュニケーション態度尺度のうちポジティブな態度において女性の得点が有意に高かった（$p<.01$）。母子の関係性については，心理的距離とコミュニケーション態度から類型化を試み，類型ごとの精神的自立の様相について，インタビュー結果と共に詳述する。

（SHOJI, Reika）